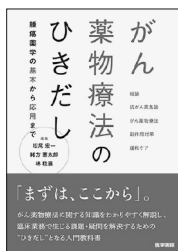


書評

〔評者〕
奥田真弘
大阪大学医学部附属病院教
授・薬剤部長



がん薬物療法のひきだし 腫瘍薬学の基本から応用まで 松尾宏一，緒方憲太郎，林 稔展 編

●B5 頁474 2020年4月
定価：本体4,500円＋税
[ISBN978-4-260-04180-5]医学書院刊

がん薬物療法は日進月歩であり，年々新薬が投入されるとともに新たなケアが導入されるなど，多様化している。2010年に発出された医政局長通知「医療スタッフの協働・連携によるチーム医療の推進について」では，医師・薬剤師が事前に作成・合意したプロトコールに基づき，専門的知見の活用を通じて医師と協働して実施するチーム医療が推奨され，薬剤師ががん患者の薬学的管理にかかわる機会も格段に増加している。がんチーム医療における薬剤師の役割は年々拡大しており，薬剤師が備えるべきがん薬物療法の知識も増加している。がん薬物療法に関する最新情報を入手するには，質の高い情報源が欠かせないが，新薬に関する情報は特定の薬剤に偏りがちであり，また治療法や副作用管理に関する情報も断片的なことが多い。

本書は，がん薬物療法の適正実施に必要な幅広い情報をがん薬物療法の最前線で活躍する薬剤師が執筆したものであり，最新のエビデンスやガイドラインに基づいてまとめられ，主な対象は薬剤師，薬学生のほか看護師，医師などの医療スタッフとなっている。本書の構成は「1. 総論」「2. 抗がん薬各論」「3. がん薬物療法」「4. 副作用対策」「5. 緩和ケア」となっており，

総論ではレジメン管理や投与管理・調製，曝露対策について触れられている。また，本文の約3分の1に相当する150ページががん薬物療法に伴う副作用対策に割り当てられており，近年注目されている免疫関連有害事象(irAE)を含む15種類の代表的な副作用が，定義，原因薬剤，アセスメント，治療または支持療法，の順に要領よくまとめられている。

本書の体裁は「ひきだし」を模している。1章，2章の代わりに「ひきだし1段目」「ひきだし2段目」が割り当てられているほか，各セクションの要点は「はじめのひきだし」として箇条書きにまとめられ，発展的な知識は「スキルアップのひきだし」として随所に挿入されるなど，読みやすさも工夫されている。箇条書きを主体として書かれているため，必要に応じて本文の途中から拾い読みすることも容易である。多忙な医療現場で活動する医療スタッフにとって，がん薬物療法を適切に実施するために必要な情報がワンストップで得られる機会は貴重と考えられる。がん薬物療法の現場に携わる医療スタッフに本書が活用されることで，がん薬物療法の適正な実施がさらに進むことが期待される。